

論文の内容の要旨

論文題目 建築のフィクティブな性質が持つ可能性についての研究 ～20世紀以降の建築、小説、映画の比較考察を通して

氏名 鈴木隆之

本研究は、モダニズムの建築史において、機能主義的な建築を中心とした流れとは異なる、もうひとつの系譜を明らかにしようとするものである。その系譜とは、未来を構想し、記憶を語ろうとする建築の系譜であり、近代の小説や映画が表現したものを、建築で表現しようとした歴史である。

今日、建築はもっぱら、現実の問題に対しての現実的な回答になろうとしている。それもすぐに実現する回答に。このような姿勢を、芸術思潮上の言葉で呼べば、リアリズムということになる。リアリズムは、現実をそのまま写し取り、そこに現れた問題に対して現実の回答を行おうとする態度のことである。経済成長という神話の崩壊や、環境危機といったリアルな問題がせりあがってきた21世紀の現代において、建築はただリアルな回答例を提示し続けているようにも見える。こうした状況で失われたのは、空想に形を与え、未来を描き記憶や歴史を物語る建築である。この物語る能力は、小説や映画においてもよく発揮されるものである。建築は小説や映画と、この点において同時代性をそなえていた。本論文ではそうした性質を持った建築を、フィクティブな建築と呼ぶ。フィクティブとは一般的には、「想像力によって創造される」という意味であるが、既往研究を検討した後に、本研究におけるこの語の定義を厳密に定める。

この研究では、この「フィクティブな建築」について、次の3点を明らかにする。

(i)20世紀以降に「フィクティブな建築」の系譜があったことと、その内容

(ii)「フィクティブな建築」は小説や映画とその「フィクティブな性質」を共有し、それによって同時代性を獲得していた。だがその同時代性は今、失われつつある

(iii)小説と映画の「フィクティブな構造」を、建築空間に応用する方法

この3点について、まず既往研究を検討する。その概要は次のとおりである。

既往研究(i)20世紀の初頭前後からの建築史において、フィクティブな建築がどのように表れ、そのように論じられてきたかを、既往研究の中に見出す。

既往研究(ii)建築が小説や映画と同時代性を持っていたことを、1910年代の芸術論争やその研究、あるいは1970年代のポストモダンの論考や研究を通して明らかにする。ポストモダンの研究は、主として記号論の論理を用いるものであったことを示す。その後、記号論

の衰退とともに、建築をフィクションと比較する研究は少なくなったことを示す。

既往研究(iii) 建築のフィクティブな性質を取り戻すには、記号論だけでは足りない。文学とグラフについての研究などを参照し、その可能性を論じる。

これら既往研究に基づいて、本研究における「フィクティブ」の語の定義を、次のように定める。

すなわち「フィクティブ」とは、

(a) リアルから一旦自由であり、アンリアルな性格を持つ
かつ

(b) 純粹主義から離れ、複数的・複層的な価値観を示す
ものである。

本研究は次の3段階からなる手法をとる。

Step 1 建築、小説、映画の性格を分類するための座標軸を作成する

Step 2 座標軸への位置づけを行い、フィクティブな性格の表現を抽出する

Step 3 フィクティブな性格の構造分析を行い、提案へと結びつける

まず、20世紀以降の建築、小説、映画の主たる思潮あるいは作品をその性格から分類し、そこからフィクティブな傾向を持ったものがどのあたりに浮かび上がるかを、歴史的に、および性格的に分析する。

この分類のために、縦軸に **real-unreal**、横軸に **pure-plural** をとった座標を設定する。この縦軸 **real-unreal** は、「フィクティブ」の語の定義のうちの、

(a) リアルから一旦自由であり、アンリアルな性格を持つ
ことについての評価を示している。

またこの横軸 **pure-plural** は、

(b) 純粹主義から離れ、複数的・複層的な価値観を示す
ことについての評価を示している。

この座標に、20世紀以降の建築思潮を位置づける。これによって

(i) 20世紀以降に「フィクティブな建築」の系譜があったことと、その内容を明らかにする。

次に、同じ座標軸に、20世紀以降の小説思潮、映画思潮を、それぞれに位置付ける。

こうして得られた座標のどこにフィクティブな建築思潮、小説思潮、映画思潮が浮かび上がるかを分析する。この際、フィクティブの強度、性質は、この座標上でどのように表れるかも考察する。さらに座標に位置付けられた思潮の手法、その思潮に含まれる作品の内容及び時代背景など、より詳細な分析を行う。

また、フィクティブではないものがこの座標中にどう表れるか、そしてそれらはどういう役割を担ってきたかについても分析を行う。特に、フィクティブな性質の対抗概念であるリアリズムが、座標中のどこに、そしてどのように表れるかは、正しく分析する必要がある。こうした分析によって

(ii) 「フィクティブな建築」は小説や映画とその「フィクティブな性質」を共有し、それによって同時代性を獲得していた。だがその同時代性は今、失われつつあることを明らかにする。

最後に、フィクティブな小説と映画の思潮や作品に的を絞り、その構造を分析する。そしてその構造の建築空間への応用方法を検討する。これによって、目的(iii)小説と映画の「フィクティブな構造」を、建築空間に応用する方法を明らかにする。

こうした研究の結果、次のような結論を得る。

「フィクティブな性質をもつもの」と定義する **unreal** かつ **plural** な領域、すなわち座標の第 1 象限に、1910 年代～20 年代、そして 1960 年代～80 年代の建築が多く現れることを明らかにした。1990 年代以降、21 世紀に入ってから、建築がこの領域に現れることが激減したこともわかった。

また、小説や映画では、現代に近づくにつれ、第 1 象限あるは第 4 象限に現れる作品が多くなっていることを確認した。1910 年代～20 年代および 60 年代～80 年代には、小説、映画、そして建築は同時代性を持ち、共通の批評言語も有していたが、90 年以降にはそれらが失われたことを確認した。

建築が第 1 象限から消える理由として、社会や経済の状況と合わせて考察すれば、リアルな建設状況をあげることができる。20 年代以降の成長・発展至上主義、あるいは 90 年代以降の経済危機や環境危機が、建築にリアルな課題を提示し、そのまま **real** の領域に押しとどめている。だが、小説や映画は、同じリアルな時代的課題に直面しながらも、**unreal** な領域からその課題を見つめ直し、表現することを続けている。

第 1 象限は<空間、時間、社会・人間>の観点において **unreal** かつ **plural** である建築・小説・映画が出現する場所である。

そして第 1 象限は、建築・小説・映画が、最もよくインタージャンルな性質を示すところでもある。

もちろん、第 1 から第 4 象限のそれぞれが、建築・小説・映画の共通の性格を明らかにしている。ただ、**real** という性格は、その **real** の内容が重要なのであり、したがって他の内容に置き換え難いことが多い。例えば「貧困」や「民族」あるいは「イデオロギー」というリアルは、他のリアルとは置き換えが困難である。

また **pure** という性格は、ひとつの意味や価値に収れんさせる方向性を重視するため、その一つの意味が他のジャンルにも共有されるものである場合もあるが、ない場合もある。

それに対し、第 1 象限すなわち **unreal** かつ **plural** では、**unreal** の内容自体が重要なのではない。<空間、時間、社会・人間>が **real** とは異なるということは、単に **real** ではない風景や物語があるというのではなく、**real** と<差異>のある「世界」がそこに表現されているということである。重要なのはその<差異>である。

また<空間、時間、社会・人間>が **plural** であるということは、そのような<差異>を

つくり出す「世界」や、＜差異＞の関係が、複数存在するということである。

そのような関係は、建築・小説・映画が共通して持ちうるものであり、また他の表現に置き換えることが可能である。第1象限の建築・小説・映画が他の象限のそれらにもましてインタージャンル性を持つのは、こうした理由による。

そこで、この第1象限に現れたフィクティブな表現の、インタージャンルな性質について、より詳細に考察した。第1象限すなわち **unreal** かつ **plural** では、**unreal** の内容自体が重要なのではない。重要なのはその **unreal** と **real** との＜差異＞である。また＜空間、時間、社会・人間＞が **plural** であるということは、そのような＜差異＞をつくり出す「世界」や、＜差異＞の関係が、複数存在するということである。そのような関係こそが、第1象限の建築・小説・映画に強いインタージャンル性を与えている。

そこで、小説や映画におけるそうした関係を構造として図式化し、そこから建築空間を構想していく手法を提案した。

建築が、今日第1象限に積極的に参加しようとしなないのは、可能性の大きな損失である。建築がただリアルな問題に対する解答をすることに終始するのであれば、未来の空間は、補修された現在の姿にしかなりえないからである。モダニズムがもたらした変化を経験し、開かれた世界に接した人間と社会が、現在の補修を永遠に続けていくことに耐えられるとは、考え難い。

未来とは、ただ発展と成長のみがもたらすものではない。それは、現在を大胆に再配置することによって描かれるフィクティブな世界である。建築には、フィクティブな世界を描く役割があったし、今もある。建築が小説や映画との同時代性をとりもどし、第1象限に再び多くの作品が現れることの意義は、そこにある。